

2. 弦を伝わる横波 (波動方程式)

ギターやバイオリンなど弦楽器の弦を伝わる横波について学ぶ

(弦の横波が従う波動方程式を求める)

弦を x 軸方向に張り、 y 軸方向への平衡位置からの変位 $y(x, t)$ が波の量である。

波の振幅が小さく、また波形 (y の関数形) の傾きも小さいとする。

弦の線密度 ρ [kg/m]と、弦の張力 T [N]が、位置や時刻によらず一定とする。

弦の微小な部分($dx = x_2 - x_1$)、質量 $dm = \rho dx$ 、がどのように運動するかを分析する

- ・ この部分は y 軸方向にだけ運動すると考える。
- ・ この部分に加わる力は、弦の張力だけ：この部分の両側で、接線の傾きが異なるため、合力が y 軸方向に生じる。

$$\text{張力の}y\text{成分} = T \sin\theta,$$

$$\theta = \text{接線が}x\text{軸となす角}$$

- ・ ・ 接線の傾きが小さいとするから

$$\sin\theta \simeq \theta \simeq \tan\theta = \partial_x y(x, t)$$

である。

- ・ ・ 合力の y 成分は

$$T \sin\theta_2 - T \sin\theta_1 \sim T \{ \partial_x y(x_2, t) - \partial_x y(x_1, t) \}$$

- ・ 運動方程式：

$$T \{ \partial_x y(x_2, t) - \partial_x y(x_1, t) \} = (\rho dx) \partial_{tt} y(x, t),$$

$$\text{右辺の}x\text{は } x_1 < x < x_2, dx \rightarrow 0 \text{ で } x_1 = x = x_2$$

- ・ 運動方程式の両辺を dx で割ると

$$\{ \partial_x y(x_2, t) - \partial_x y(x_1, t) \} / dx \rightarrow \partial_{xx} y(x, t)$$

となり

$$T \partial_{xx} y(x, t) = \rho \partial_{tt} y(x, t)$$

を得る。これは、位相速度

$$c = \sqrt{\frac{T}{\rho}}$$

の波動方程式に他ならない。

3. 問 1

(1) $c = \sqrt{\frac{T}{\rho}}$

(2) $[T] = [M][L][T]^{-2}$, $[\rho] = [M][L]^{-1}$, $\left[\sqrt{\frac{T}{\rho}}\right] = ([L]^2[T]^{-2})^{\frac{1}{2}} = [L][T]^{-1}$

(c)

$$\frac{\partial^2 y}{\partial x^2} - \frac{1}{c^2} \frac{\partial^2 y}{\partial t^2} = 0,$$

$$\frac{\partial^2 y}{\partial x^2} = \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{\partial y}{\partial x} \right): \quad \text{まず, } \frac{\partial y}{\partial x} \leftarrow \frac{\Delta y}{\Delta x}, \left[\frac{\Delta y}{\Delta x} \right] = \frac{[\Delta y]}{[\Delta x]} = \frac{[L]}{[L]} = 1 (\text{無次元}), \quad \left[\frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{\partial y}{\partial x} \right) \right] = \frac{\left[\frac{\Delta y}{\Delta x} \right]}{[\Delta x]} = \frac{1}{[L]}$$

4 弦を伝わる波のエネルギー 1

横波が来ると、弦が横方向に振動する。

横波がサイン波のとき、弦の一部は単振動する。

この単振動のエネルギーを求める。

弦を張った方向を x 軸とする。

$x \sim x + dx$ の部分が x 軸と直交する y 軸方向に振動し、変位を $y(x, t)$ とする。

弦の密度を、単位長さあたり ρ とする (ρ は線密度、単位は $[\text{kg/m}]$) 。

この部分の

$$\text{運動エネルギー} = (1/2) (\text{質量}) \times (\text{速度})^2 = \frac{1}{2} (\rho dx) (\partial_t y)^2$$

$$\text{位置エネルギー} = \text{張力がする仕事}$$

この仕事は「張力 $T \times$ 弦の伸び ds 」と表せる。

弦が横波の形に変形して伸びた量

$$\begin{aligned} ds &= (dx^2 + dy^2)^{1/2} - dx \\ &= dx \{1 + (\partial_x y)^2\}^{1/2} - dx \\ &\sim dx \left\{1 + \frac{1}{2} (\partial_x y)^2\right\} - dx \\ &= \frac{1}{2} (\partial_x y)^2 dx \end{aligned}$$

近似計算 (\sim) には、テーラー展開による 1 次近似、

$$(1+z)^{\frac{1}{2}} \sim 1 + \frac{1}{2}z$$

を用いた。

$$\text{張力がする仕事} = T \times ds = T \times \frac{1}{2} (\partial_x y)^2 dx$$

$$\text{位置エネルギー} = \frac{1}{2} T (\partial_x y)^2 dx$$

$$dx \text{ の部分がもつ力学的なエネルギー} = \text{運動エネルギー} + \text{位置エネルギー}$$

$$= \frac{1}{2} (\rho dx) (\partial_t y)^2 + \frac{1}{2} T (\partial_x y)^2 dx$$

5 問2

(i) ②の部分が移動する速さ（波のエネルギーが移動する速さ）： c

(ii) y 方向の変位の速さ： $u = \frac{\partial y}{\partial t} = \frac{A}{L}c$, dx に含まれる質量： $dm = \rho dx$, 運動エネルギーは $\frac{1}{2}(dm)u^2 = \frac{1}{2}\left(\frac{Ac}{L}\right)^2 \rho dx$

(iii) $|x| \ll 1 \rightarrow \sqrt{1+x} \simeq 1 + \frac{1}{2}x$ より, $\sqrt{L^2 + A^2} - L = L\sqrt{1 + \left(\frac{A}{L}\right)^2} - L \simeq L\left(1 + \frac{1}{2}\left(\frac{A}{L}\right)^2\right) - L = \frac{1}{2}\frac{A^2}{L}$

(iv) 長さ L に対する伸びが $\frac{1}{2}\frac{A^2}{L}$ だから, dx に対する伸びは $\left(\frac{1}{2}\frac{A^2}{L}\right)\left(\frac{dx}{L}\right)$. 位置エネルギーは $T\left(\frac{1}{2}\frac{A^2}{L}\right)\left(\frac{dx}{L}\right) = \frac{1}{2}\left(\frac{A}{L}\right)^2 T dx$

(v) 波の速さが $c = \sqrt{T/\rho}$ となるので $\frac{1}{2}\left(\frac{Ac}{L}\right)^2 \rho dx = \frac{1}{2}\left(\frac{A}{L}\sqrt{T/\rho}\right)^2 \rho dx = \frac{1}{2}\left(\frac{A}{L}\right)^2 \frac{T}{\rho} \rho dx = \frac{1}{2}\left(\frac{A}{L}\right)^2 T dx$

(vi) ①③ではエネルギーが0となり, ②では

$$\frac{\partial y}{\partial t} = c\frac{A}{L}, \quad \frac{\partial y}{\partial x} = -\frac{A}{L} \quad \rightarrow \frac{1}{2} \left\{ \rho \left(\frac{\partial y}{\partial t}\right)^2 + T \left(\frac{\partial y}{\partial x}\right)^2 \right\} dx = \frac{1}{2} \left\{ \rho \left(c\frac{A}{L}\right)^2 + T \left(\frac{A}{L}\right)^2 \right\} dx = \frac{1}{2}\left(\frac{A}{L}\right)^2 (\rho c^2 + T^2) dx$$

となる. 最右辺の第1項が弦の運動エネルギー, 第2項が位置エネルギーである. 両者は等しいので, エネルギーを $\left(\frac{A}{L}\right)^2 \rho c^2 dx$ あるいは $\left(\frac{A}{L}\right)^2 T^2 dx$ と書いてもよい.

6 サイン波のエネルギー密度

サイン波

$$y = A \cos(kx - \omega t)$$

では

$$\partial_t y = \omega A \sin(kx - \omega t)$$

$$\partial_x y = -kA \sin(kx - \omega t)$$

エネルギー密度 u は

$$u = \frac{1}{2} \{ \rho (\partial_t y)^2 + T (\partial_x y)^2 \} = \frac{A^2}{2} \{ \rho \omega^2 + T k^2 \} \sin^2(kx - \omega t)$$

ここで

$$\rho \omega^2 + T k^2 = \rho \omega^2 + (\rho v^2)(\omega/v)^2 = 2\rho \omega^2$$

よって

$$u = \rho \omega^2 A^2 \sin^2(kx - \omega t)$$

エネルギー密度の時間平均

$$\langle u \rangle = \frac{1}{2} \rho \omega^2 A^2$$

7 問3

(i) $\omega = \sqrt{k/m}$

(ii) $x(t) = A \cos \omega t, v(t) = -\omega A \sin \omega t$

(iii) $K(t) = \frac{1}{2}mv^2 = \frac{1}{2}m\omega^2 A^2 \sin^2 \omega t, V(t) = \frac{1}{2}kx^2 = \frac{1}{2}kA^2 \cos^2 \omega t$

(iv) $E = K(t) + V(t) = \frac{1}{2}kA^2 \cos^2 \omega t + \frac{1}{2}m\omega^2 A^2 \sin^2 \omega t = \frac{1}{2}kA^2 = \frac{1}{2}mv^2 =$ 時間的に変化しない

(v) $\langle K \rangle = \frac{1}{2}m\omega^2 A^2 \sin^2 \omega t = \frac{1}{2}m\omega^2 A^2 \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}m\omega^2 A^2, \quad \langle V \rangle = \frac{1}{4}kA^2 = \frac{1}{4}m\omega^2 A^2 = \langle K \rangle,$

$E \stackrel{\text{時間的に一定}}{=} \langle E \rangle = \langle K + V \rangle = \langle K \rangle + \langle V \rangle = \frac{1}{2}m\omega^2 A^2 = \frac{1}{2}kA^2:$ 振幅の 2 乗に比例, 振動数の 2 乗に比
だから平均しても
同じ値になる

例

(vi) サイン波のエネルギー密度 $\langle u \rangle = \frac{1}{2}\rho\omega^2 A^2$ に微小な長さ dx をかけ, その内部のエネルギー

$$dE = \langle u \rangle dx = \frac{1}{2}\rho dx \omega^2 A^2 = \frac{1}{2} dm \omega^2 A^2$$

となり, (v) の力学的エネルギー E とまったく同じになる. 弦の 1 カ所に注目すると, その部分は単振動を行うのだから当然の結果だろう.

8 サイン波のパワー

弦にサイン波の進行波があるとき、弦のどの部分にも、単位長さあたり $\langle u \rangle$ の平均的なエネルギー密度がある。

ここで、

$$\langle u \rangle = \frac{1}{2} \rho \omega^2 A^2$$

であった。

波の移動とともに、このエネルギーが伝わる。その速さは波の速さに等しい。

弦の1点を1秒に通過する波のエネルギー（=波のパワー）は、

その点の左側にある「波が1秒で伝わる距離 = $v \times 1$ 秒」に含まれる平均エネルギーである。

したがって、1点を通過する波のパワーの時間平均は

$$\langle P \rangle = \langle u \rangle c = \frac{1}{2} \rho \omega^2 A^2 c$$

波の速さは

$$c = \sqrt{\frac{T}{\rho}}$$

と書けるので

$$\langle P \rangle = \frac{1}{2} \rho \omega^2 A^2 \sqrt{\frac{T}{\rho}} = \frac{1}{2} \sqrt{T \rho} \omega^2 A^2$$

9 固定境界条件

自由端では弦に力が働かず、弦は伸び縮みしない。

弦の伸びは

$$(dx^2 + dy^2)^{\frac{1}{2}} - dx = dx \{(1 + (\partial xy)^2)^{1/2} - 1\} = dx \frac{1}{2}(\partial xy)^2$$

だから、自由端では

$$(\partial xy)^2 = 0 \quad \rightarrow \quad \partial xy = 0$$

となる。

「自由端では常に、横波の接線の傾きが0となる」

この条件を満たす波は、数学的には、つぎのように作り出すことができる。

1. 自由端をもたない無限に長い弦を考える
2. 左側から自由端に向かう入射波に対し、まったく同じ振幅をもつ波を、右から入射させる
3. ふたつの波の振幅を、自由端で同じになるように重ね合わせると、自由端を原点とする偶関数の波になる。
4. どんな偶関数も原点で傾きが0だから、条件が満たされる。
5. 自由端の左側では、どちらの波も波動方程式の解だから、重ね合わせたものも解である。
6. 自由端の左側で、左に進む波が、自由端で生じた反射波である。

10 問4

単一振動数の定在波は、その振動数のサイン波の進行波を両向きに重ねてつくる。
そのとき定在波の形は

$$A \cos(kx) \cos(\omega t)$$

となることを既に学んだ。

ここでは、 $x = 0$ で振幅が常に0となるので、座標原点を適切に選びなおして

$$A \sin(kx) \cos(\omega t)$$

と書くと、

$x = 0$ で常に振幅が0となる。時間波形は時間の原点をとりなおして $\sin(\omega t)$ としてもかまわない。
つぎに、 $x = L$ で振幅が常に0となるためには、 k は任意の値ではなく、

$$kL = \pi \times n, \quad n = 1, 2, 3, \dots$$

となる。したがって

$$kn = \frac{2\pi}{\lambda} = n \frac{\pi}{L}$$

が弦に立つ波の波数に対する条件となる。

波長の条件として書き直すと

$$\lambda n = 2 \frac{L}{n}$$

振動数の条件として書き直すと

$$v_n = \frac{c}{\lambda n} = \frac{c}{2L} \times n = \frac{n}{2L} \times \sqrt{\frac{T}{\rho}}$$

となる。

長さ L 、両端固定の弦が、単一の振動数で共鳴するときは、これらのとびとびの振動数に限られる。

振動数 v_1 の波を **基本波**、 v_n を **第 n 高調波** (n 倍波ともいう) という。

それぞれの単一振動数の波の波形を、この弦の基準振動モードという。

基準振動モードは、弦が共鳴する1つの振動数における定在波の波形であり、節と腹がある。

11 自由境界条件

自由端では弦に力が働かず，弦は伸び縮みしない。

弦の伸びは

$$(dx^2 + dy^2)^{\frac{1}{2}} - dx = dx \{(1 + (\partial xy)^2)^{1/2} - 1\} = dx \frac{1}{2}(\partial xy)^2$$

だから，自由端では

$$(\partial xy)^2 = 0 \quad \rightarrow \quad \partial xy = 0$$

となる。

「自由端では常に，横波の接線の傾きが0となる」

この条件を満たす波は，数学的には，つぎのように作り出すことができる。

1. 自由端をもたない無限に長い弦を考える
2. 左側から自由端に向かう入射波に対し，まったく同じ振幅をもつ波を，右から入射させる
3. ふたつの波の振幅を，自由端で同じになるように重ね合わせると，自由端を原点とする偶関数の波になる。
4. どんな偶関数も原点で傾きが0だから，条件が満たされる。
5. 自由端の左側では，どちらの波も波動方程式の解だから，重ね合わせたものも解である。
6. 自由端の左側で，左に進む波が，自由端で生じた反射波である。

反射波を決める条件は：入射波と反射波の重ね合わせは、 $x = 0$ における接線の傾きが0となる。

(i) 左に進むサイン波は $h_L(x, t) = A \cos(kx + \omega t + \phi)$ と表せる。

$$\frac{\partial}{\partial x} f_R(x, t) = -kA \sin(kx - \omega t), \quad \frac{\partial}{\partial x} h_L(x, t) = -kA \sin(kx + \omega t + \phi)$$

$$\left. \frac{\partial}{\partial x} f_R(x, t) \right|_{x=0} + \left. \frac{\partial}{\partial x} h_L(x, t) \right|_{x=0} = 0 \rightarrow -kA \sin(-\omega t) = kA \sin \omega t = -(-kA \sin(\omega t + \phi)) \rightarrow \phi = 0$$

$$f_L(x, t) = A \cos(kx + \omega t),$$

$$f = f_R + f_L = A(\cos(kx - \omega t) + \cos(kx + \omega t)) = 2A \cos kx \cos \omega t$$

(ii) 左に進むサイン波は $h_L(x, t) = A \sin(kx + \omega t + \psi)$ と表せる。

$$\frac{\partial}{\partial x} g_R(x, t) = kA \cos(kx - \omega t), \quad \frac{\partial}{\partial x} h_L(x, t) = kA \cos(kx + \omega t + \psi)$$

$$\left. \frac{\partial}{\partial x} g_R(x, t) \right|_{x=0} + \left. \frac{\partial}{\partial x} h_L(x, t) \right|_{x=0} = 0 \rightarrow kA \cos(-\omega t) = kA \cos \omega t = -(kA \cos(\omega t + \psi)) \rightarrow \psi = \pi$$

$$g_L(x, t) = -A \sin(kx + \omega t)$$

$$g = g_R + g_L = A(\sin(kx - \omega t) - \sin(kx + \omega t)) = -2A \cos kx \sin \omega t$$

13 弦の基準振動モード

単一振動数の定在波は、その振動数のサイン波の進行波を両向きに重ねてつくる。
そのとき定在波の形は

$$A \cos(kx) \cos(\omega t)$$

となることを既に学んだ。

ここでは、 $x = 0$ で振幅が常に 0 となるので、座標原点を適切に選びなおして

$$A \sin(kx) \cos(\omega t)$$

と書くと、 $x = 0$ で常に振幅が 0 となる。時間波形は時間の原点をとりなおして $\sin(\omega t)$ としてもかまわない。
つぎに、 $x = L$ で振幅が常に 0 となるためには、 k は任意の値ではなく、

$$kL = \pi \times n, \quad n = 1, 2, 3, \dots$$

となる。したがって

$$kn = \frac{2\pi}{\lambda} = n \frac{\pi}{L}$$

が弦に立つ波の波数に対する条件となる。

波長の条件として書き直すと

$$\lambda n = 2 \frac{L}{n}$$

振動数の条件として書き直すと

$$vn = \frac{c}{\lambda n} = \frac{c}{2L} \times n = \frac{n}{2L} \times \sqrt{\frac{T}{\rho}}$$

となる。

長さ L 、両端固定の弦が、単一の振動数で共鳴するときは、これらのとびとびの振動数に限られる。

振動数 v_1 の波を **基本波**、 v_n を **第 n 高調波** (n 倍波ともいう) という。

それぞれの単一振動数の波の波形を、この弦の基準振動モードという。

基準振動モードは、弦が共鳴する 1 つの振動数における定在波の波形であり、節と腹がある。

14 問6

1 (a) 図略

(b) $v_0 = \frac{c}{2L}$ より, 弦長が2倍(半分)になると基本振動数が $1/2$ の60 Hz(2倍の240 Hz)になる.

2 (a) 図略

(b) (i) 振幅は, 両端と中央で0, 端から $1/4$ および $3/4$ だけ離れた位置で逆位相・最大)となる. サイン関数の1周期分.

(ii) 左半分と右半分では位相が 180° 異なり, それぞれの中ではどの位置の位相差も0である.

3. 両側が固定端の弦の中央付近に腹がある振動モードは, 基本振動の次が(第二高調波はなくて)第三高調波となるから.

15 問7

$$f_1 = \frac{c}{\lambda_1} = \frac{1}{2L} \sqrt{\frac{T}{\rho}} \quad \text{より} \quad \rho = \frac{T}{(2Lf)^2} = \frac{50}{(2 \times 0.33 \times 440)^2} \approx 6 \times 10^{-4} \text{ kg/m}$$

220 mm

16 両側が固定端の弦の波動方程式の解

両端が固定されている、長さ L の弦 $[0, L]$ には（基準モード以外に）どのような波が立つのか、波動方程式

$$\partial_{xx} y - \frac{1}{c^2} \partial_{tt} y = 0$$

に基づいて考える。

固定端の条件を満たす基準振動モードの解

$$y_n = A_n \sin\left(\frac{n\pi x}{L}\right) \cos(\omega_n t), \quad \omega_n = c k_n = 2\pi \frac{c}{\lambda_n} = n\pi \frac{c}{L}$$

の重ね合わせで一般的な解が求まると考える。

「一般的な解をフーリエ展開すると基準振動モードになる」と考え

$$y = \sum y_n$$

とする。

どのフーリエ成分も固定端条件を満たすので、それらの重ね合わせである y も固定端条件をみたすし、どの成分も波動方程式を満たすので、 y も波動方程式の解であることが保証される。

各成分の係数（振幅） A_n はどのようにして決まるかを考える。

時刻 $t = 0$ において時間を含む項が $\cos 0 = 1$ となるので

$$y(x, 0) = \sum y_n(x, 0) = \sum A_n \sin(n\pi x/L)$$

すなわち、 $t = 0$ における弦の形 $y(x, 0) = g(x)$ が与えられると、そのフーリエサイン級数の係数として A_n が求まる：

$$A_n = \frac{2}{L} \int_0^L g(x) \sin\left(\frac{n\pi x}{L}\right) dx$$

$y(x, 0) = g(x)$ を初期条件といい、 $y(t, 0) = y(t, L) = 0$ を境界条件という。

ある時刻に弦の特定の箇所をつまみあげ、静かに放すときの音色（どのような振動数成分がどれだけ含まれるか）は

つまむ位置で異なる。最初の三角形の波形をフーリエ展開すると、音色が分かる。

実際、弦の中央付近をつまんだときに比べ、端の法をつまんだほうが、短い波長成分が多く含まれるので、高い振動数成分がふくまれて

硬い音になる。